

Fuji Learning Information No. 12

2017年5月15日

旭川藤女子高等学校

藤の学び改革は2014年に開始した本校の教育システムです。実は、本校ではそれ以前から学び改革の理念でもある「自ら学ぶ」力を育ててきたコースがあります。それがULコースです。

学び改革の前身としてのULコース

2001年にスタートしたこのコースは、「英語の力を高め国際社会で活躍できる人材を育てて行く」という目標を掲げ、スタートしました。国際社会で活躍できる人材とは、英語で海外の人たちと議論できる力をもった人材と位置づけ、そのために5つの柱として「英語力」、「積極性」、「自立心」、「判断力」、「思いやる心」を育てることが必要と考え、それに基づきプログラムを構成してきました。

具体的なプログラムとして重視してきたのは、まず使える英語を鍛えることです。ネイティブの授業を含め英語の授業を充実させ、北海道に来ている留学生を交えた3泊4日のイングリッシュキャンプ(ULキャンプ)、ホームステイをしながらの3か月間のニュージーランド留学、シナリオ制作からキャスト、裏方まで自分達で企画運営をおこなう英語劇(ドラマ)制作・発表、国際的なテーマを一年間かけて英語で追究するCurrent Events(国際事情)の授業の中で、それを深めるために行うUL Conferenceなど独自のプログラムを通して英語力を高める実践を積み重ねてきました。



ULキャンプ



ニュージーランド留学中に日本伝統文化のプレゼンテーション

また、これらのプログラムを通して、コミュニケーション能力、企画力、運営力、主体性などを育てることを意識してきました。なので、様々なプログラムの実践は、生徒主体によるものがほとんどです。生徒はこの機会に、失敗したり苦しんだり悩んだりしながら学び成長してゆきます。当初、生徒主体の企画運営は時間がかかりますが、繰り返して経験する中で、コツをつかみレベルアップし、精度が高まり、達成感を味わうようになってゆきます。生徒主体ですので教師の側に忍耐力が必要であり、ファシリテーション能力が求められる場面でもあります。

さらに、これらを高めるためには、モチベーションを高めるシステムが必要と考え、MBS(モチベーション・ビルディング・システム)を運用してきました。目的をもち、そのために今、何をしなければならぬかを確認し、実行し、修正が必要であれば手を加え、次のステップへ進める計画を立てることができる力です。これを、専用のシートを使って行ってきました。まさにPDCA

の考え方そのものです。つまり、現在の学び改革の中でPDC Aの力をつける「PDSノート」の前身にもあたります。

このように、ULコースではこれらのプログラムを通して、「自ら学ぶ力」や「自ら進む力」を育ててきたと言えます。

実社会で求められる力をつけるULコース

ニュージーランド留学での生徒達の気づきの中で最も重要だと思うのは、自ら考え一歩前へ踏み出し自分で物事を解決してゆくことの大切さに気付くことです。日本人に欠けていて、国際社会で必要とされる力に生徒達は気づかされて帰国します。でもこれは、日本人が普段の生活や学習の中で、いかに受け身な姿勢で生きていたかという表れでもあります。それを普段の学校生活の中で、身につけて行こうというのが学び改革です。

また、Current Events（国際事情）の授業では、それまでに蓄えた英語力はもとより、自ら学びを広げる力を高めることを意識しています。テーマを探す力、そこから問題点や課題をとらえる力、その問題点や課題を解決する力、それに対して自分はどうか考え行動するかという力を養うことです。

これらの力をつけた生徒達は、受験でもこれらの力をいかに発揮し、大学でもさらに高いレベルの力をつけて行きます。ULコースでは、これらの仕掛けを通して社会で求められている力を育てています。



このようなULコースの雰囲気は？

ここまで紹介したようなプログラムをもったULコースはどんな雰囲気なのかを紹介します。

このコースを選ぶ生徒達は、「英語力を高めたい！」「留学がしたい！」「将来海外で働きたい！」など、目標がはっきりしており積極的な気持ちをもった生徒が多いのが現状です。そういう生徒達に、さらに意図してこのようなプログラムを提供すると、どのようになるか？だいたい想像がつくと思います。さらに前へ前へと前進し続けます。普段の行動も発言も考え方も、遠慮なく前進します。猪突猛進型と表現すれば一番わかりやすいのかもしれませんが、ULコースが当初、意図した方向に、生徒は成長し続けていると思います。

グローバル社会で必要とされる人材を育成するコースへ

このコースが出来てしばらくの間、「ULコースは英語科ですよ？」と聞かれることがたびたびありました。当時、道内にも「英語科」を置いていた高校がありました。しかし、ULコースと英語科の大きな違いは、「自ら考えて行動し物事を解決する力を養う」という、社会で求められる力を育てる目標が意図されていたかどうかだと思います。同時にそれは、中味のある英語で発信する取り組みでもありました。それを貫き、進化させてきたULコースは、グローバル社会へと進化した時代にふさわしいコースとして、その役割がますます大きく期待されていると考えています。

今回は、ULコースの英語力や学力の伸びについて紹介します。

